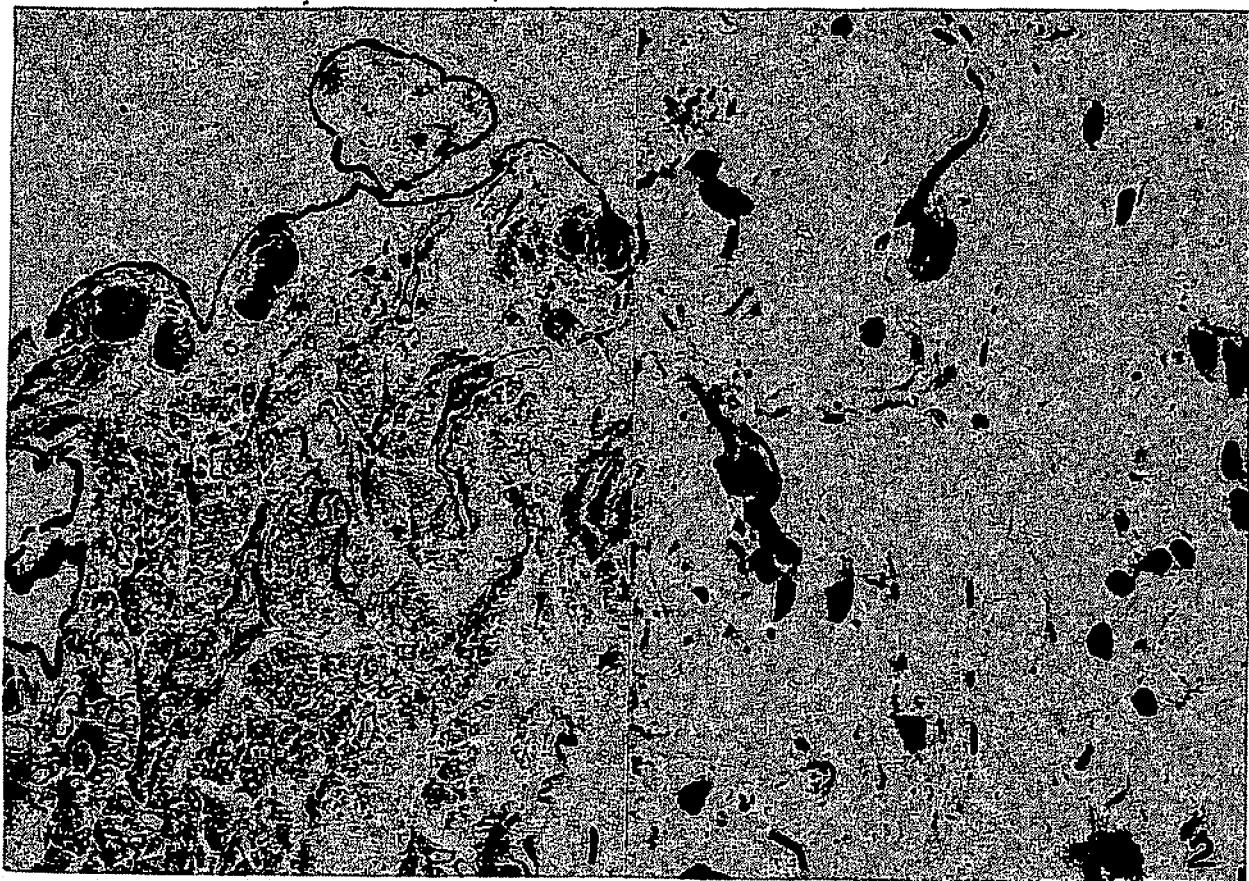


# 左右外側喉頭室の生検材料(LP-17)

第11回獣医病理学研修会 標本No.154

競走馬保健研究所研究四課 (病理)



固定：10%ホルマリン液。染色：H-E。動物：馬、アングロアラブ種、牡、2年9ヵ月令（1961年4月9日生）、黒鹿毛。繁殖地：東京。生産地：青森県。

臨床事項：2才時、喘鳴症と診断され、喘鳴音著しく、競走馬として供用できないため2年3ヵ月令時に研究所に移籍。その後、2年9ヵ月令時、日競研外科担当者によってフローセン全身麻酔下で、両側の外側喉頭室の粘膜を切除した。手術時、外側喉頭室の腔は右側に比較して左側が浅腔であった。術後経過ならびに予後は良好で、喘鳴の程度は著しく軽減した。

肉眼所見：切除された左側の外側喉頭室粘膜は右側に比較して厚さを増し（約2mm）、粘膜面はや、溜濁感のある粟粒大顆粒状（牛舌状）隆起を呈し、粘膜下織は湿潤顕著であった。

組織学的所見：粘膜下織は固有層の増巾があり、著しい水腫であった。粘膜固有層にはリンパ様小結節が多数みられ、リンパ小結節の過形成を呈した（写真1、×184、

H-E染色）。これらの水腫とリンパ様小結節に相一致して、この部の粘膜表面は丘隆状を呈していた。これらの所見は右側の外側喉頭室粘膜に比較して、左側において顕著であった。

水腫の著しかった粘膜固有層部における微細弾性線維成分は小塊状化、膨化、断裂ないし線維増巾があり好酸性を呈した。これらの変化は弾性線維成分の変性を示すものであった（写真2、×700、H-E染色）。また、小血管周囲の水腫性変化もみられた。

肉眼的にみられた粘膜壁の増巾ならびに粘膜面の粟粒大顆粒状隆起は、組織学的には水腫性変化に随伴したリンパ様小結節の過形成であった。これらの変化は本症において主役をなすものであり、喘鳴発症と深い関係を有するものと考えた。なお、リンパ様小結節の過形成については、ある種の微生物感染を疑い各種染色を施したが微生物は確認し得なかった。

組織学的診断：慢性過形成性喉頭炎。